

岡山市・福山市における方言使用に関する社会言語学的研究：動詞打消し、打消し過去、アスペクト

| | |
|-----|---|
| 著者 | 尾崎 喜光 |
| 雑誌名 | ノートルダム清心女子大学紀要．外国語・外国文学編，文化学編，日本語・日本文学編 = Notre Dame Seishin University kiyo |
| 巻 | 44 |
| 号 | 1 |
| ページ | 71-95 |
| 発行年 | 2020 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1560/00000446/ |

岡山市・福山市における方言使用に関する 社会言語学的研究

— 動詞打消し、打消し過去、アスペクト —

尾崎 喜光*

A Sociolinguistic Study of the Use of Dialect in Okayama City and Fukuyama City:
Verbal Negative Form, Past Negative Form, Aspect Form

Yoshimitsu OZAKI

1. はじめに

話し言葉を中心とする現代日本語の動態の一端を明らかにするため、筆者が在勤する岡山市において現在動態を示すと考えられる表現を中心に、回答者数としては十分とはいいがたい面もあるが、言語使用に関する多人数調査（回答者は無作為に選ばれた 20 歳から 79 歳までの岡山市民の男女 81 人）を 2013 年秋に実施した。

調査項目は多岐にわたるが、これまで分析を終えて結果を報告したものに、連母音の融合に関するもの（尾崎喜光 2014）、依頼表現としての「～てもらっていい?」（尾崎喜光 2015）、「大丈夫です」の用法の拡大（尾崎喜光 2016）、文末における女性的表現・男性的表現の使用（尾崎喜光 2017）、親族呼称の変化（尾崎喜光 2018a）、新古で対立する外来語（「バンド」と「ベルト」等）や複合語において古めかしさを持つ語（「ふでばこ」や「げたばこ」）（尾崎喜光 2018b）がある。

この調査では、調査項目が多岐にわたる中でも、岡山方言の使用に関する項目を充実させた。これに関する報告は、現在のところ、連母音の融合（尾崎喜光 2014）に関する項目にとどまっている。

そこで本稿では、それ以外の岡山方言に関する項目、特に文法（語法）に関する項目を取り上げ、その分析結果を報告する。

なお、文法に関する分析といっても、本稿では詳細な記述研究を行うのではなく、また言語地理学的な分析を行なうのでもない。むしろ、これまで岡山方言の特徴とされてきたさまざまな文法表現を、岡山市への転入者をも含む現在の岡山市民のうちどれくらいの割合の人が使っているかという観点から、方言と対立する共通語の使用との張り合い関係も含め、現在の状況を明らかにすることを目的とする。

取り上げる項目は、動詞の打消し、打消し過去、アスペクトである。

キーワード：方言文法、言語変化、無作為抽出多人数調査

Keywords: dialect grammar, language change, random sampling survey of large number

※ 本学文学部日本語日文学科

2. 調査概要

本稿で議論の根拠とするデータは次の調査により得たものである。いずれも筆者がたずさわった調査であり、実査は調査会社に委託した。^{注1}

- (1) 岡山市：人口比に応じた確率で無作為に選ばれた岡山市8地点の中から、性別・年齢層について母集団の構成比を反映するよう層化して無作為に選ばれた20歳～79歳の男女81人が回答。調査方法は個別面接法（福山市での調査も同様）。実査は2013年10月～11月に実施。調査員は5名。
- (2) 福山市：岡山市での調査と同様の方法で選ばれた福山市8地点の中から、やはり岡山市での調査と同様の方法で選ばれた20歳～79歳の男女80人が回答。実査は2018年10月～11月（女性40人）、2019年5月～6月（男性40人）の2年に分けて実施。調査員は6名。（6名とも岡山市調査とは別の調査員）

福山市調査について少し説明を加える。

当初は岡山市調査で研究を完結する計画でいたが、岡山県のすぐ西側に位置する広島県福山市は、広島県の中心地である広島市までよりも岡山市までのほうがはるかに距離が近く（JRだと福山駅・広島駅間が約103kmであるのに対し福山駅・岡山駅間は約58km）、旧国名も「備後」であって岡山県の「備中」「備前」とともに「吉備国」の一部をなすなど、広島県にありながら岡山県との近接性や共通性を有し人口規模も約46万人と大きな都市であることから（岡山市の人口は約72万人）、先に実施した岡山市調査との共通性・相違性を明らかにすることを主たる目的とする調査を福山市でも実施することとした。

福山市調査も、岡山市調査と同様に1年間で実施する予定でいたが、調査委託費の高騰によりそれが困難であることが明らかになったことから2年間に分け、2018年に女性40人、2019年に男性40人を調査した。調査時期の隔たりをできるだけ小さくし、実質的にはほぼ同時期1回の調査となるよう、2019年の男性の調査は5月～6月に実施した。これにより調査期間の幅を7か月程度におさえた。

2018年の女性の調査では調査地点を4地点選んだ。翌2019年の男性の調査でも4地点を選ぶこととなったが、地点数が少ないため通常の選定方法によると、女性の4地点と大きく離れた地点のみが選定されることもありえ、もしそうなった場合、男女差と見られた違いがじつは地域差である可能性が排除できない。そこで、その可能性をできるだけ小さくするため、男性の調査地点は女性の調査地点の隣接地点とした。

実査は調査会社に委託したことから、母集団に対する回答者グループの代表性は十分確保されていると考えられるが、まずはその点について確認する。

図1は母集団と回答者の性別構成比を比較したものである。なお、回答者の年齢は20歳～79歳に限定したことから、これと比較する母集団もこの年齢幅の構成比とする。岡山市は51万1307人（2012年の住民台帳による）、福山市は34万5035人（2018年の住民台帳による）である。

これによると、岡山市の母集団の構成比と回答者の構成比はほぼ同じであることが確認される。構成比はいずれも男性が約48%、女性が約52%であり、女性の方が多少多い。

福山市についても、母集団の構成比と回答者の構成比はほぼ同じであることが確認される。ただし細かく見ると1.4%ほどの違いがある。回答者数にすると、女性を1人減らして男性を1人増やすと、母集団の構成比にほぼ一致する。

結論としては、岡山市も福山市も、性別構成比については、回答者グループは母集団をほぼ正確に反映していることが確認される。

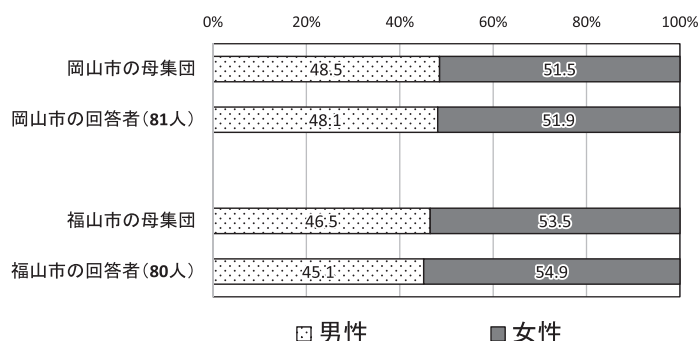


図1 母集団と回答者の性別構成比の比較

図2は母集団と回答者の年齢層別構成比を比較したものである。年齢層は、本稿の分析で用いる3層とした。

これによると、岡山市も福山市も、母集団の構成比と回答者の構成比はほぼ同じであることが確認される。母集団も回答者も、どの年齢層もおおよそ3割である。

結論としては、年齢層別構成比についても、岡山市も福山市も、回答者グループは母集団をほぼ正確に反映していることが確認される。

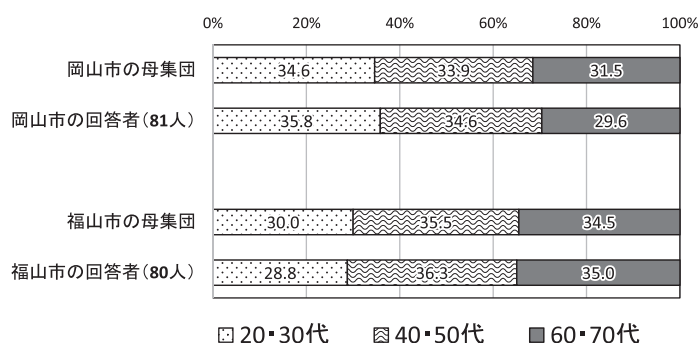


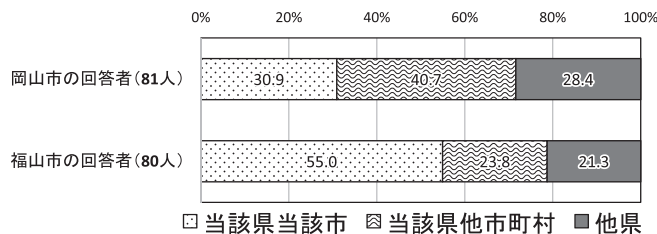
図2 母集団と回答者の年齢層別構成比の比較

図3-1は回答者の出身地である。出身地に関する母集団の統計データは簡単には得られないため、母集団と回答者との比較を示すことはできないが、上記の性別・年齢層がいずれも両者がほぼ同じであったことから、母集団もおおよそ回答者グループと同じ構成比であると推測される。なお、岡山市も福山市も、回答者数がそれほど多くないことから、出身地別の分析までは行わないが、回答者の地理的背景に関する情報の一つとして示す。

これによると、岡山市の回答者のうち約7割は岡山県出身であり、そのうちの4割強（全体の約3割）は調査地点である岡山市であることが確認される。逆に県外からの転入者は約3割いる。

一方福山市は、回答者のうち約8割は広島県出身であり、そのうちの7割（全体の約5～6割）は調査地点である福山市であることが確認される。逆に県外からの転入者は約2割いる。

両市を比較すると、県レベルではいずれも地元出身者が7～8割と多くを占めるが、市町村レベルでは、県内他市町村からの転入者の方がむしろ多い岡山市と、地元福山市出身者が約7割と多くを占める福山市という違いがある。地元性という点で言えば、それが濃厚な福山市と、市町村レベルにおいてはそれがやや希薄な岡山市という、出身地から見た地理的背景の違いがある。

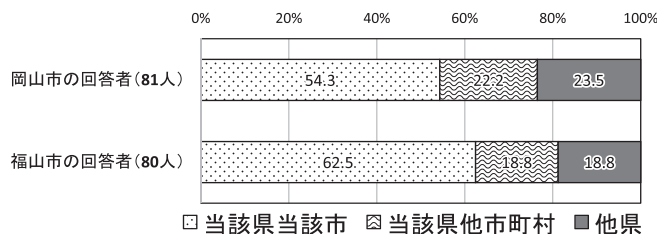


□ 当該県当該市 ▨ 当該県他市町村 ■ 他県

図 3-1 回答者の出身地

図 3-2 は回答者の 15 歳（中学卒業）までの最長居住地である。言語形成期をどこで過ごしたかも、回答者の言葉の地理的背景として重要であることからこれも確認した。言語形成期の期間は必ずしも定説があるわけではないが、およそ 5 歳から 12～13 歳とされているが、回答者の回答しやすさを考慮し「15 歳まで（中学を卒業するまで）」とした。

両市を比較すると、県レベルではいずれも地元出身者が 8 割前後と多くを占める。市町村レベルでは、先に見た出身地と異なり、岡山市においても地元岡山市を最長居住地とする者が県内の約 7 割を占める。つまり、小さいうちに県内他市町村から岡山市に転入した者が少なからずいるということになる。一方福山市も、地元福山市が県内の 8 割弱と多くを占め、両市で大きな違いはない。最長居住地という点から回答者の地理的背景を見ると、岡山市も福山市も、地元市を多く含む地元県が 8 割前後の多く占めている。



□ 当該県当該市 ▨ 当該県他市町村 ■ 他県

図 3-2 回答者の 15 歳まで（中学卒業まで）の最長居住地

なお、福山市については、広島県にありながら岡山県との近接性や共通性を有することを先に述べた。福山市の調査では、言語使用に関する質問に加え、このことに関する質問を 2 つ設定した。1 つは、広島市と岡山市を比べたときどちらに親しみを感じるかという心情的な近接性に関する質問である。もう 1 つは、もし買い物に行くとしたら広島市と岡

山市のどちらに行きそうかという行動面における近接性である。言語使用に関する調査結果を見る前に、言語使用の背景ともなる福山市民のこうした意識面・行動面に関する結果をまず確認しておこう。なお、本稿では、言語使用の分析においてこの結果と積極的に関連づけて考察することまではせず、回答者の背景の一つとして確認するにとどめる。

広島市と岡山市のどちらに親しみを感ずるかについては次の質問により確認した。回答者には、選択肢のみが書かれた「回答票」を示しながら回答させた。下記の選択肢の下線は回答票の選択肢にも付し、異なる箇所について注意喚起した。

Q 5. あともう少し、ふだんの生活についてお聞きします。

(1) 〔回答票 50〕 広島市と岡山市を比べたとき、どちらにより親しみを感ずるか？

- (ア) 広島市に親しみを感ずる
- (イ) 岡山市に親しみを感ずる
- (ウ) どちらも同じくらい親しみを感ずる
- (エ) どちらにも親しみを感ずらない
- (オ) わからない

結果は図 4 のとおりであった。

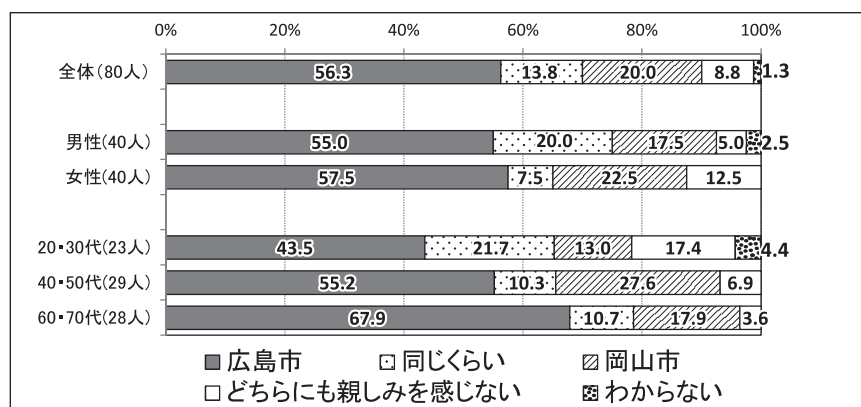


図 4 広島市と岡山市のどちらに親しみを感ずるか (福山市)

これによると、広島市に親しみを感ずると回答した人は全体としては約 6 割、岡山市に親しみを感ずると回答した人は 2 割で、心情的な近接性に関しては広島市に大きく傾くことがわかる。かつては岡山市と同じ「吉備国」であっても、現在は広島市と同じ「広島県」であるということが要因として大きいものと推測される。もっとも、同じ広島県であるにもかかわらず「岡山市」と回答した人が 2 割いる点はむしろ注目される。

男女に分けて分析しても、多少の異なりはあるものの、岡山市よりも広島市に大きく傾くという点においては違いがない。この点については年齢層別に見ても同様であるが、広島市に親しみを感ずる人の割合は 60・70 代では約 7 割と極めて高いものの、若い年齢層になるに従い数値が一貫して低下する傾向が認められる。

一方、広島市と岡山市のどちらに買い物に行きそうかについては次の質問により確認した。

(2) [回答票51] どうしても買いたい品物があるとします。残念ながら福山市には売っていません。しかし、広島市か岡山市であれば買えるとします。どちらに行きそうでしょうか？

- (ア) 広島市に行きそう
- (イ) 岡山市に行きそう
- (ウ) どちらも行きそう
- (エ) わからない

結果は図5のとおりであった。

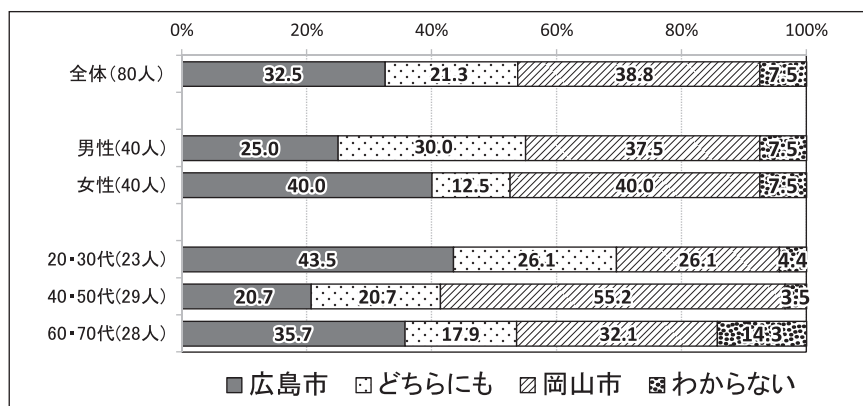


図5 広島市と岡山市のどちらに買い物に行きそうか（福山市）

これによると、広島市に行きそうと回答した人は約3割、岡山市に行きそうと回答した人は約4割であり、大きな差とは言えないものの、数値はむしろ「岡山市」に傾く点は注目される。公共交通機関（主としてJR）で行くにしろ自家用車で行くにしろ、岡山市までの方が圧倒的に距離が近いことが要因として大きいものと考えられる。

男女に分けて分析しても、「岡山市」の数値が高い点は同様である。ただし年齢層別に見ると、40・50代は「岡山市」に大きく傾く一方、20・30代はむしろ「広島市」に傾く点が注目される。若年層は距離よりもむしろ都市規模等に反応した可能性が考えられる。

福山市の回答者については以上のような意識や背景を持っているということをふまえながら、以下では言語使用に関する調査結果を見ることとする。

3. 調査結果

3.1. 動詞の否定の表現（否定辞）

国立国語研究所が全国約800地点の生え抜き高年層男性を対象に1980年前後に臨地面接法により調査した結果をまとめた『方言文法全国地図』（全6集；以下GAJ）のうち、動詞の否定形の分布を示した第80図「書かない」によると、東日本には主として「ナイ」

系（「ネ（－）」等を含む）の否定辞が、西日本には古典語の「ヌ」に由来する「ン」が分布している。岡山県・広島県も全域「ン」である。ただし西日本の中でも近畿中央部では、「ン」の取り立て否定「～ワセン」（「行キワセン」等）に由来する「ヘン」（ないしはそのバリエーションである「ヒン」等）が通常の否定辞として発生・分布し、西側は兵庫県と岡山県の県境にまで分布域を広げている。この「ヘン」が、現在の岡山市や福山市においてどの程度用いられているのが注目点の一つとなる。

本調査では次の質問文と選択肢により回答を求めた。動詞は「買う」とし、共通語で言えば「買わない」をふだんどう言うかを回答させた。会話相手等の言語場面は特に明示的に示すことはしなかったが、いずれの選択肢も丁寧語を含まない表現とすることで、家族や友人等の気の置けない人との会話場面を回答者に想定させた。そうした場面であっても複数の表現を用いる回答者がいることは十分想定されることから、自分で言うことのある表現を全て選択させた。なお、下記のうち「どれも言わない」はじつは回答票にはなく、調査票にのみある。これは、回答者がもしどれも選択しなかった場合、調査票にはどこにもチェックが付かないことになるが、そのままだと調査漏れである疑いが出てくる。そこで、調査漏れではなくどれも選択しなかったということを積極的にマークするために、調査票にだけは「どれも言わない」がある。

（１）〔回答票22〕「家にあるから買わない」の「買わない」をふだん何と言っていますか？

次の言い方のうち、自分で言うことがあるものをすべて選んでください。

- （ア） 買わない
- （イ） 買わね
- （ウ） 買わん
- （エ） 買わへん
- どれも言わない

結果は図6-1（岡山市）・図6-2（福山市）のとおりであった。

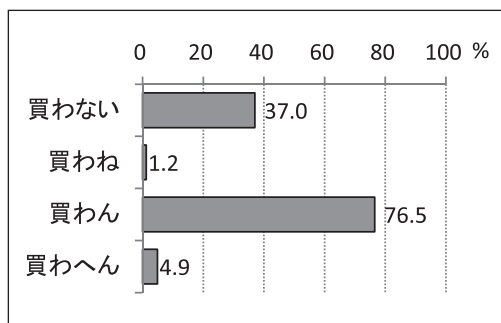


図6-1 <買わない>（岡山市）

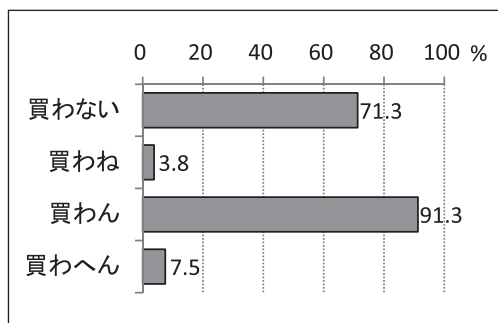


図6-2 <買わない>（福山市）

岡山市も福山市も使用者率が最も高い表現は「買わん」であり、現在でも動詞の否定辞としては「ン」が最も一般的であることが確認される。

次いで使用者率が高いのは「買わない」である。本来は否定辞「ない」を使わない西日本

の岡山市・福山市においても、共通語が広く普及し、また「ない」を使う地域からの転入者も以前よりは多く含むようになった現在では、「ない」の使用者率も低くない点が注目される。とりわけ福山市の使用者率は7割にまで達する。ただし、本設問のみならずどの設問のどの選択肢においても、福山市での数値は岡山市よりも高くなる傾向が見られる。実際にそうであるのかもしれないが、調査員が複数回答をどの程度積極的に促したかの違いが現われている可能性もある。もし後者の違いがあるとしたら、数値自体は注意して読む必要があるし、岡山市と福山市との数値の比較も注意深くある必要があるが、各地点における選択肢間の序列については確実性が高いものと考えられる。結論としては、岡山市も福山市も最も一般的な否定辞は「ん」であるが、「ない」もそれに次いで使用者率が高いということになる。

なお、「ない」の連母音を融合させた「ね」を否定辞とする「買わね」を言う人はほとんどいない点も注目される。否定辞「ない」は形容詞「ない」に由来するが、形容詞の活用語尾は当該地域では融合して発音する傾向が強い。岡山市調査の結果を分析した尾崎喜光(2014)によると、「赤い」をアケーとする回答者は約5割、「長い」をナゲーとする回答者は約7割いる。岡山県の高校生以下の若年層を中心とする575人の連母音の融合を調査した尾崎喜光(2013)もほぼ同様の結果を得ている。こうした状況から考えると、形容詞「ない」に由来する否定辞「ない」を含む「買わない」の融合形「買わね」(ないしは「買わねー」)の使用者率は高くなることが見込まれるが、実際には両市ともほとんどいない。これは、物の不在を表す「無い」は形容詞であるため連母音を融合させた「ねー」はありうるが、否定辞「ない」は岡山市・福山市においては共通語の表現であることから、これを方言的に「ね(一)」と崩すことがしにくいため「買わね」とは言えないものと考えられる。

注目された近畿中央部の否定辞「へん」を含む「買わへん」は、使用者率がゼロではないものの、岡山市でも福山市でも数値は非常に低いことが確認される。「買わん」との数値的關係という点から見ても、1割ないしはそれ以下である。現在においても近畿中央部の「へん」は、両市にほとんど及んでいない。なお、調査項目とはしなかったが、単なる否定ではなく取り立て否定としては、近畿中央部の「へん」の元の形でもある「～やせん」等が、岡山県では現在も用いられている。

村上敬一(2005)は、近畿地方と中国地方の接点である兵庫県南西部(姫路市)から岡山県南東部(岡山市)までのJR山陽本線・赤穂線沿線の21地点を対象に、2002年から2003年にかけてグロットグラム調査(3年齢層×21地点の調査)を実施した結果を示している。このうち否定辞(「行かない」)については、山間部の山陽本線側においても沿岸部の赤穂線側においても、兵庫県側の「～ヘン」(「行カヘン」)対岡山県側の「～ン」(「行カン」)という、県境が表現の境界となる状況を示している。当時もおお県境が言語交流(関西中央部方言の浸透)の大きな障壁となっている。調査地点や調査方法は異なるが、その約10～15年後の本調査によると、現在の岡山市・福山市でもこの状況にほとんど変化がないことが確認される。

GAJの約30年後となる2010年から2015年にかけて、全国554地点の70歳以上の生え抜きを対象に実施した国立国語研究所共同研究プロジェクト「方言の形成過程解明のための全国方言調査」(FPJD)の主要項目を言語地図としてまとめた大西拓一郎編(2016)の「来ない」「しない」(解説＝岸江信介氏)によると、GAJでは関西(中央部)に分布していたヘンは、関西の中の周辺部へ、さらには四国や関西の東部へと分布域を拡大していることが指摘されているが、関西の西側である岡山県には拡大していない。

図6-3は岡山市と福山市を比較しやすいよう組み替えたものである。

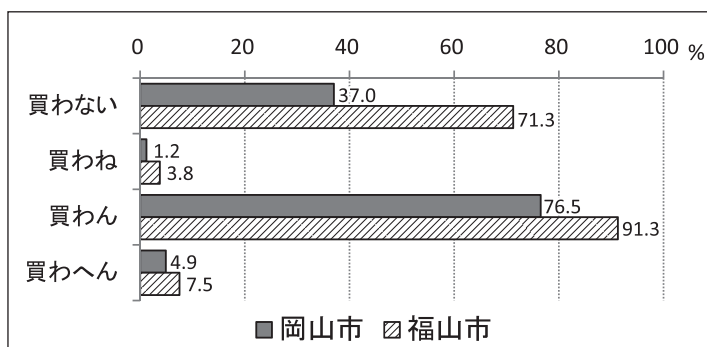


図 6-3 <買わない> (岡山市と福山市の比較)

先述したように、いずれの選択肢も福山市の方が数値が高い。複数回答した者が福山市で相対的に多かったことが改めて確認される。

「買わん」は両市の差がそれほど大きくないのに対し、「買わない」はそれが非常に大きい点が注目される。複数回答の促し方の違いに起因する可能性もあるが、これだけ差が大きいことを考えると、福山市では否定辞「ない」の使用者率が実際に高い、あるいは逆に岡山市では否定辞「ない」の使用者率が相対的にかなり低い可能性がある。ただし、もしそうだとした場合、その理由は現在のところ不明である。

図 6-4・図 6-5 は、岡山市・福山市の結果を属性別（男女別・年齢層別）に分析したものである。総数が岡山市 81 人、福山市 80 人にとどまるため、属性別分析は精度が限定的である。特に年齢層別分析は、3 層にとどめたものの、1 層あたりの回答者数は 30 人を切るため読み取りに注意を要する。そこでここでは、数値の大きな違いの有無という点から結果を見ていくこととする。

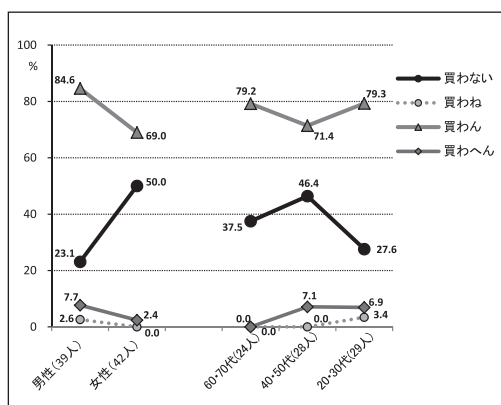


図 6-4 <買わない> (岡山市)

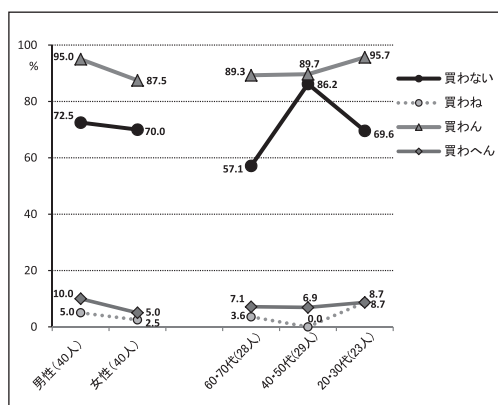


図 6-5 <買わない> (福山市)

男女別に見ると、岡山市の男性の共通語「買わない」の使用者率が、女性に比べ著しく低い点が注目される。

年齢層別に見ると、「買わん」の使用者率は岡山市でも福山市でも年齢層による大きな違いはなく、若年層においても高いまま安定している点が注目される。共通語の「買わな

い」も、一貫した傾向を持ちつつ大きな年齢差が伴うということもない。「買わへん」も若年層に向けて急増するというようなことは特にならない。年齢差については、全般的に両市とも顕著な違いはなく、おおよそ安定している状況である。

3.2. 動詞の否定過去の表現

GAJ のうち動詞の否定過去の表現の分布を示した第 151 図「行かなかった」によると、西日本のうち中国地方は、東側から鳥取県および広島県の東部までが「行かなんだ」が分布し、それより西側は「行かざった」や「行かだった」が分布している。「行かなんだ」と「行かざった」「行かだった」が接する地域は併存する地点も少なくない。岡山市には「行かざった」「行かだった」は分布していないが、福山市付近は併存の形で分布が見られる。この他、「なんだ」では否定と過去という 2 つの要素が融合しているが、これを分離させて、否定辞は方言の「ん」とし、これに後接する過去は共通語の「かった」とする「行かんかった」が広島市付近等の一部の都市部に見られる。こうした点が両市でどのようなになっているのかが注目される。

質問文と選択肢は次のとおりである。動詞は「買う」とした。

(2) [回答票 23] では、「家にあるから買わなかった」の「買わなかった」は、ふだん何と言っていますか？ 自分で言うことがあるものをすべて選んでください。

- (ア) 買わなかった
- (イ) 買わなんだ
- (ウ) 買わんかった
- (エ) 買わへんかった
- (オ) 買わざった
- どれも言わない

結果は図 7-1（岡山市）・図 7-2（福山市）のとおりであった。

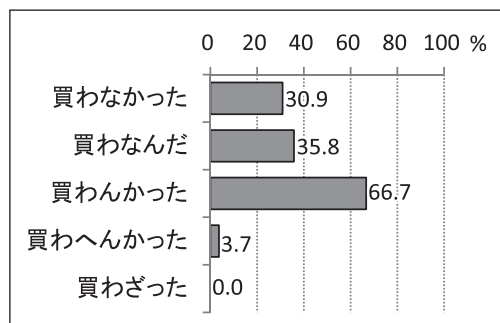


図 7-1 <買わなかった> (岡山市)

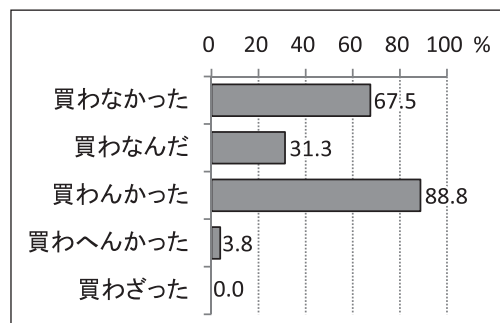


図 7-2 <買わなかった> (福山市)

両市とも使用者率が最も高い表現は、GAJ では一部の都市部付近にのみ認められた「んかった」による「買わんかった」であることが確認される。逆に、GAJ ではこれらの地域を広く覆っていた「なんだ」による「買わなんだ」は、これに次ぐ勢力に縮小している。「な

んだ」から「んかった」への変化が進み、現在では「んかった」の方が優勢な状況である。

福山市では一定程度の使用者率が認められることが見込まれた「買わざった」は全く用いられていない。この点については岡山市も同様である。

GAJでは近畿中央部の一部に認められた、取り立て否定由来の「買わへん」に「かった」を接続させた「買わへんかった」は、両市とも使用者率は非常に低い。打消しの「へん」と同様、近畿中央部からの「へんかった」の進出はほとんど認められない。

これらのほか、打消しの部分も含めて共通語形である「買わなかった」も、現在では使用者率が低くない点も注目される。

図 7-3 は岡山市と福山市を比較しやすいよう組み替えたものである。

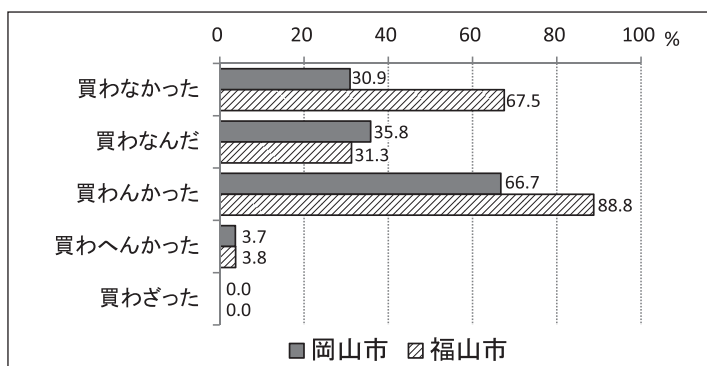


図 7-3 <買わなかった> (岡山市と福山市の比較)

福山市は岡山市よりも複数回答が積極的であったためか、「買わなかった」「買わんかった」ともに数値が岡山市よりも高い。そうした中において「買わなんだ」はむしろ岡山市の方が数値が高い。GAJによると福山市は「買わなんだ」の分布域の端に近い地域であるのに対し、岡山市は周辺まで広く「買わなんだ」が分布しているため使用が安定しているという違いに起因するのかもしれない。

図 7-4・図 7-5 は属性別(男女別・年齢層別)に分析したものである。使用者率がゼロである「買わざった」の表示は省略した。数値の大きな違いの有無という点から結果を見ていく。

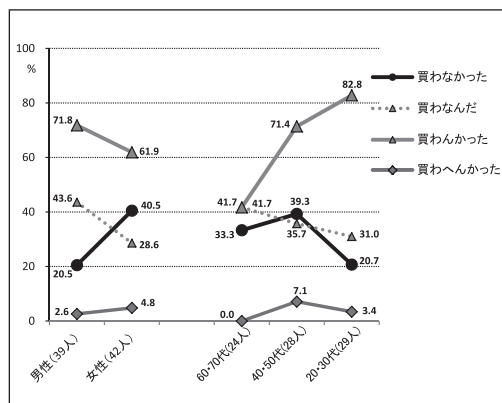


図 7-4 <買わなかった> (岡山市)

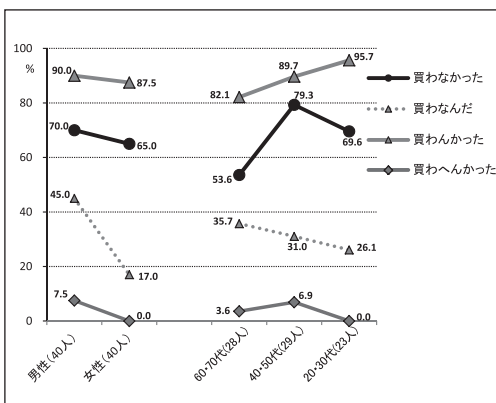


図 7-5 <買わなかった> (福山市)

男女別に見ると、方言形の「買わなんだ」は、岡山市・福山市ともに女性よりも男性の方が使用者率が高い。特に福山市での男女差は著しい。伝統方言の「なんだ」は、現在では男女差を伴い、主として男性により使用される表現となっている。

年齢層別に見ると、新しい方言形の「買わなかった」は、若年層になるに従い一貫して使用者率が増加する。岡山市でも福山市でもこの表現が現在普及しつつあることが反映されているものと考えられる。他のさまざまな表現と併用される形で、20・30代では非常に多くの割合の人が使う表現となっている。一方、伝統方言の「買わなんだ」は若年層に向けて使用者率が著しく低下するということなく、一定程度の中で安定的に使われている。

以下では、先行研究で明らかにされていることとの関係という点から本研究の結果を検討する。なお語形の表記は先行研究において示されたままとする。

岡田統夫（1967）は、福山市からおよそ30km西に位置する広島県三原市のある農村において使われている打消過去の表現について昭和42年（1967年）に調査した。その結果、20代以下の年少者では男女を問わず「ンカッタ」を用いていること、相対的に古い表現と考えられる「ザッタ」の変異形「ダッタ」は高年層の男性において優勢であるのに対し女性は相対的に新しくかつ品のよい表現である「ナンダ」が優勢であること等を示している。「ダッタ」と「ナンダ」の関係について、得られた回答を数値化して年齢層別に分析したところ、年齢が下るにしたがい「ダッタ」よりも「ナンダ」の勢力が強くなるとしている。本研究で福山市において「買わざった」が全く見られなかったのは、すでに半世紀前から「ざった」「だった」が衰退しつつあったことも関係していると考えられる。半世紀前には年少者のみに見られた「んかった」は、近くの福山市では現在どの年齢層でも使用者率が非常に高く、この表現がこの間に普及したことがわかる。

岡山県北の新見市坂本方言について、自然傍受により得た談話資料をデータとして、否定表現の種類とその用法を調査した友定賢治（1993）は、過去否定には5つの表現があること、このうち「ナンダ」は最も高頻度でかつ全年齢層にわたって用いられていること、「ンカッタ」は若年層に用いられていることを報告するとともに、「ザッタ」については老年層に主として用いられるが徐々に使われなくなりつつあるとする。「ザッタ」→「ナンダ」→「ンカッタ」という変化はこのあたり一帯に共通して見られる変化であると言える。

やはり岡山県北の一部である美作地方の建部町・福渡町・津山市・加茂町（2地点）・勝北町において昭和41年（1966年）に打消表現について調査した大藤幸枝（1966）は、過去の打消表現としては「～ナンダ」型の表現のみが各層（年齢層）の男女で用いられているとする。示された談話例を見ると、「ナンニモアリヤーシマシェナンダ」「ハイリマセナンダナー」のように丁寧語「マス」との共起も確認される。半世紀前の岡山県北では、丁寧体においても「なんだ」が優勢であったことがわかる。

一方、岡山県の東側である兵庫県南西部（姫路市）から岡山県南東部（岡山市）までをグロットグラム調査をした村上敬一（2005）によると、動詞の打消し（否定）過去形（「行かなかった」）については、岡山県側の高年層には「～ナンダ」（「行カナンダ」）がさかんでこれは中年層にも見られるが、若年層にはこれが皆無であり「～ンカッタ」（「行カンカッタ」）へと変化しているとする。岡山市を含む岡山県東部でも、「ナンダ」→「ンカッタ」の変化があることが確認される。

これとほぼ同時期の 2006 年度に、やはりほぼ同一地域である播磨～備前～備中～備後の 4 地域をまたぐグロットグラム調査をした都染直也編 (2007) でも、解説は特にないが資料を見ると、「来なかった」は、播磨はコーヘンカッタが優勢であるが、備前以西では、高年層ではコナンダが優勢である一方、低年層ではコンカッタが優勢であり、その間の中年層では両者が拮抗していることが確認される。

GAJ の約 30 年後に実施された FPJD の主要項目について分布図と解説を示した大西拓一郎編 (2016) には「行かなかった」がある (解説 = 大西拓一郎氏)。東日本では広くナカッタ類が用いられているのに対し、西日本西日本にはナンダ類をはじめとする多様な形式が分布していること、GAJ と較べるとナンダ類は分布領域を狭めそれに代わってンカッタ類が広まりを示し、山陽地方でもンカッタ類が増えていること等を指摘している。大西拓一郎 (2017) も、GAJ で「ンカッタ」(行カンカッタ) が (ほとんど) 見られなかった地域において、FPJD では使用が確認されるようになったことを指摘しているが、岡山県も該当地域の一つである。西日本の広域で「ンカッタ」が領域を広げていることが、実時間比較による言語地理学的調査によっても確認される。

中国地方を対象としたごく最近の言語地理学的調査に、広戸惇氏による『中国地方五県言語地図』の約半世紀以上後の追跡調査も兼ねて中国地方 649 地点を対象に 2014 年度に通信調査 (回答者は各地生え抜きの 55 歳以上の者) した結果を地図集にまとめた岸江信介・塩川奈々美・清水勇吉・林琳編 (2019) がある。解説は特にないが、岡山県・広島県の瀬戸内側での分布を見ると、「行かなかった」は「イカナンダ」と「イカンカッタ」が併存していること、「イカザッタ」は尾道市の北にわずかに分布している程度にとどまることが確認される。

以上、本調査と関連する岡山市・福山市の周辺地域における言語地理学的調査、グロットグラム調査で得られた (「ザッタ」→「ナンダ」→「ンカッタ」という変化は、本調査で得られた結果と符合する。

3.3. アスペクト

(1) 有情物の存在動詞

筆者は JR 岡山駅で当駅始発の上り新幹線のひかり号に乗ることがよくある。ある日、早々に乗車して出発を待っていたところ、「向い側、のぞみ号が到着しております。」という車内アナウンスがあった。追い越しをするのぞみ号がすでに向い側の駅ホームに入っていて停車しているのかと思い車窓の外に目を向けたところ、そこに新幹線は見えなかった。しばらく待っていたところ、のぞみ号が駅ホームに進入してくるのが見えた。

共通語で「到着している」は、すでに到着して停車している状態を言うこともあれば、このケースのように今まさに到着しつつある状態を言うこともあるため誤解が生じうる。この点、進行態と結果態を区別して表現する西日本は便利である。

このアスペクト表現として「～テ(イ)ル」等の「イル」系を使うか、それとも「～トル」「～ヨル」等の「オル」系を使うか (あるいは「アル」系を使うか) は、人間等の有情物が存在することを「イル」と表現するか「オル」と表現するか (あるいは「アル」と表現するか) ということと密接に関係する。

国立国語研究所が全国 2,400 地点の高年層男性 (生え抜き) を対象に 1960 年前後の約 10 年間 (昭和 30 年代) に臨地面接法により調査した結果をまとめた『日本言語地図』(全

6 集;以下 LAJ) のうち、人の存在動詞の分布を示した第 53 図「いる (居る)」によると、東日本および近畿中央部には「イル」系が、西日本には「オル」が分布している。近畿南部 (和歌山県) には「アル」も分布するが、大きく見ると「イル」と「オル」の東西対立型の分布である。岡山県・広島県も全域「オル」である。近畿中央部の「イル」は岡山県の東側の兵庫県にはほとんど及んでおらず、兵庫県もほぼ全域「オル」である。

そこで、アスペクトについて分析するのに先立ち、有情物の存在動詞について調査した結果をまず見ておく。

質問文と選択肢は次のとおりである。

(4) [回答票 25] 「人がいる」の「いる」は、ふだん何と言っていますか？ 次の言い方のうち、自分で言うことがあるものをすべて選んでください。
(ア) (人が) いる
(イ) (人が) おる
どれも言わない

結果は図 8-1 (岡山市)・図 8-2 (福山市) のとおりであった。

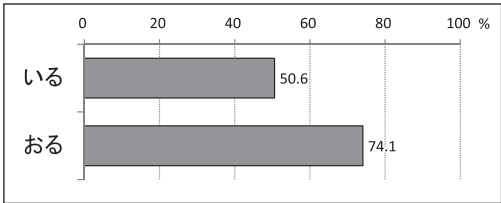


図 8-1 <(人が)居る> (岡山市)

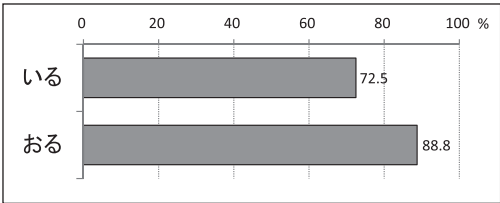


図 8-2 <(人が)居る> (福山市)

岡山市・福山市ともに「おる」の使用者率の方が高く、8 割前後が用いている。しかし現在では「いる」の使用者率も少なくなく、岡山市では 5 割、福山市では 7 割が用いている。

図 8-3 は岡山市と福山市を比較しやすいよう組み替えたものである。福山市は複数回答の割合が相対的に高いためか「いる」も「おる」も岡山市より数値が高くなるが、岡山市も福山市も、「いる」と「おる」の序列やそれらの数値的關係 (「いる」は「おる」の 7～8 割) はおおそ同じである。

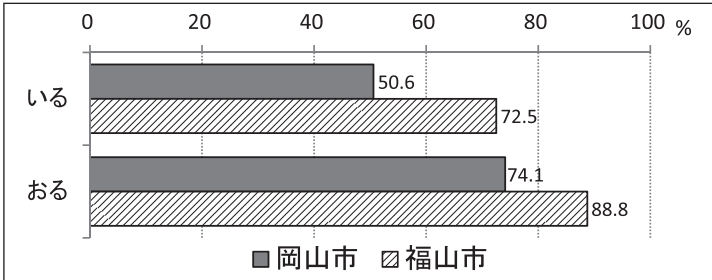


図 8-3 <(人が)居る> (岡山市と福山市の比較)

図 8-4・図 8-5 は属性別（男女別・年齢層別）に分析したものである。

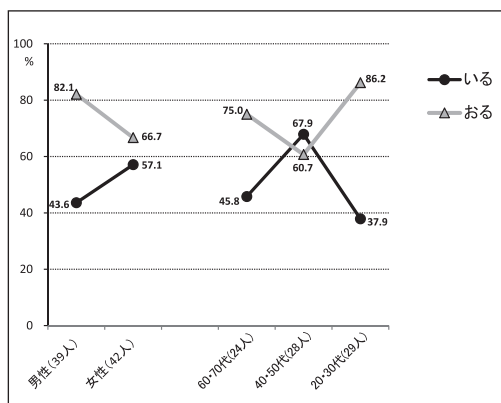


図 8-4 <(人が)居る> (岡山市)

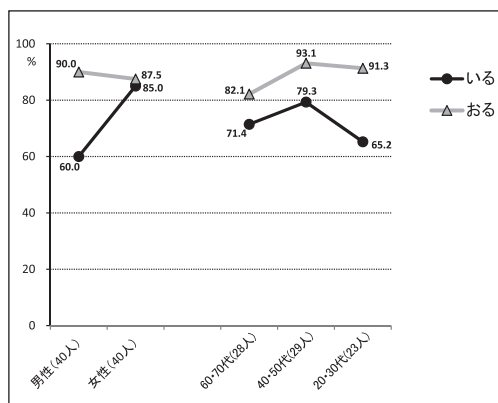


図 8-5 <(人が)居る> (福岡市)

男女別に見ると、共通語の「いる」は、両市とも男性よりも女性で使用者率が高い。

年齢層別に見ると、方言形の「おる」は若年層になるに従い使用者率が減少するというようなことはなく、比較的高い数値を維持している。方言形の中でも根強く使われている表現であると言える。

FPJD の主要項目を報告した大西拓一郎編（2016）によると、東日本では広く（人が）イルが、西日本では（人が）オルが用いられ、現在でも東西対立の分布となっていること等を指摘している（解説＝大西拓一郎氏）。中国地方はほぼ全域オルのみである。方言形「おる」の根強さは、地理的に縮小を見せないところにも表れている。

(2) 進行態

人間の存在を表す動詞は、西日本では現在でも「おる」が根強く用いられていること、岡山市・福岡市もそうであることを踏まえながら、アスペクトの形式を見ていく。まずは進行態について見てみよう。

質問文と選択肢は次のとおりである。動詞は「降る」とした。

(5) 〔回答票 26〕 部屋から窓の外を見ていたところ、空から雪が降ってきました。その様子を見て、ふだん何と言いますか？ 次の言い方のうち、自分で言うことがあるものをすべて選んでください。

- (ア) (あっ、雪が) 降りよーる
- (イ) (あっ、雪が) 降りりよる
- (ウ) (あっ、雪が) 降りよる
- (エ) (あっ、雪が) 降っとる
- (オ) (あっ、雪が) 降っちよる
- (カ) (あっ、雪が) 降ってる

どれも言わない

結果は図 9-1（岡山市）・図 9-2（福山市）のとおりであった。

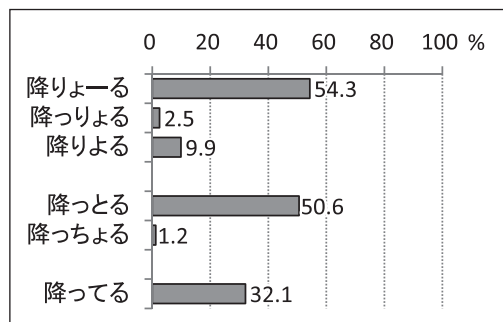


図 9-1 <降っている(進行態)>（岡山市）

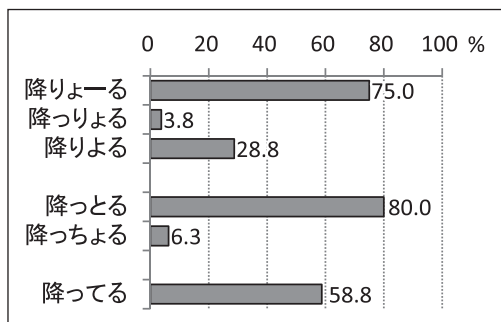


図 9-2 <降っている(進行態)>（福山市）

アスペクト形式として「おる」を用いる西日本では、動詞連用形に「て」を介して「おる」を接続する結果態（「降っ（＝り）ておる」→「降っとる」等）と、「て」を介さずに「おる」を接続する進行態（「降りおる」→「降りよる」やその変化形「降りよーる」等）とで本来区別される。

すなわち、ここで論じる進行態については、「降りよる」ないしは「降りよーる」の使用が期待される。

図を見ると、岡山市でも福山市でも「降りよーる」の使用者率が現在でも半数を超えるものの、結果態を表すはずの「降っとる」も進行態として用いられ、その使用者率も「降りよーる」とほぼ同水準となっていることが最大の注目点である。このことについては、後に触れるように、西日本におけるアスペクト表現を対象とする少なからぬ先行研究で指摘されている。

なお、本来のアスペクト表現のバリエーションという点について言えば、「降りよる」よりも、ここから発音が[rjo:]→[rjo:]と変化した「降りよーる」の方が両市ともに優勢である。「降りりよる」を用いる人は非常に少ない。また、本来は結果態を表すアスペクト表現のバリエーションでは、「降っちよる」は極めて劣勢であり、言うとなればほぼ「降っとる」である。

一方、「いる」を含む共通語形「降ってる」（<「降っている」）の使用も、3割（岡山市）ないし6割（福山市）認められる。人の存在動詞として「いる」を使う人が岡山市でも福山市でも現在少なからずいることと連動し、共通語形「降ってる」を使う人も現在では少なからずいる点も注目される。

図 9-3 は岡山市と福山市を比較しやすいよう組み替えたものである。

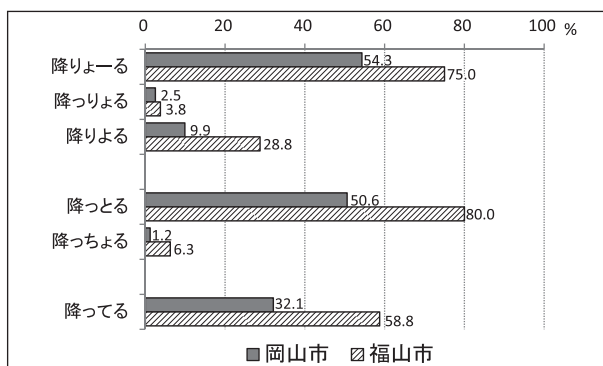


図 9-3 <降っている(進行態)>（岡山市と福山市の比較）

福山市は複数回答が積極的であったためか、どの表現についても使用者率は福山市が高くなっているが、「降りよーる」≒「降っとる」>「降ってる」という序列は両市で共通する。

図 9-4・図 9-5 は属性別（男女別・年齢層別）に分析したものである。

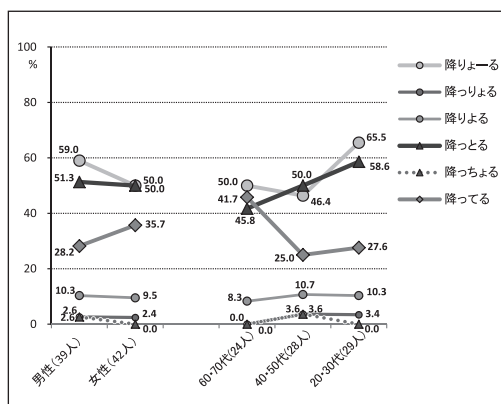


図 9-4 <降っている（進行態）＞（岡山市）

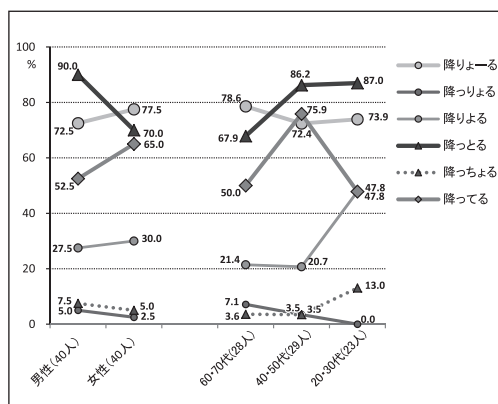


図 9-5 <降っている（進行態）＞（福山市）

男女差については全般的に顕著な違いは見られないが、福山市において「降っとる」は女性よりも男性で数値がかなり高い。

年齢層別に見ても、数値の変化方向が一貫してかつ顕著な違いは見られない。むしろ、本来は使われていなかった「降っとる」が、岡山市においても福山市においても 60・70 代ですでに数値が高くなっている点、従来の「降りよーる」は 20・30 代の若年層でも数値が低下しているわけではない点が注目される。「降っとる」と「降りよーる」を中心とする表現が安定的に使われているのが現在の状況であると言える。

(3) 結果態

次に結果態について見てみよう。

質問文と選択肢は次のとおりである。動詞は進行態と同様に「降る」とした。

(6) [回答票 27] 次の日、家の窓を開けたところ、雪はもうやんでいましたが、庭やベランダに雪が降り積もっているのに気付いたとします。そんなとき、ふだん何と言いますか？ 自分で言うことがあるものをすべて選んでください。

* 選択肢は「進行態」と同様

結果は図 10-1（岡山市）・図 10-2（福山市）のとおりであった。

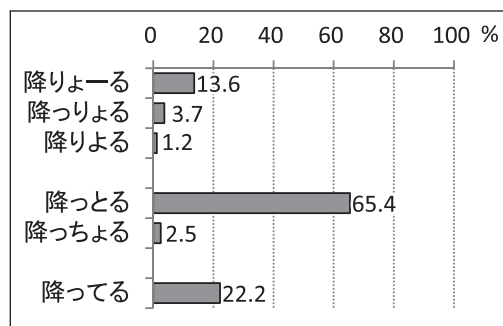


図 10-1 <降っている(結果態)>

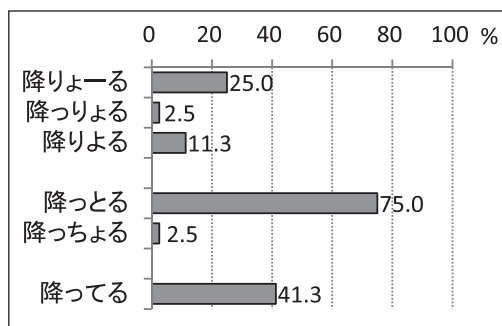


図 10-2 <降っている(結果態)> (福山市)

アスペクト形式として「おる」を用いる西日本では、動詞連用形に「て」を介して「おる」を接続する形式が従来結果態として用いられている。すなわち「降っとる」の使用が期待される。

図を見ると、岡山市でも福山市でも「降っとる」の使用者率が最も高く7割前後となっていることが確認される。結果態は「とる」で表現するという点は従来と基本的に変わりがない。

注目されるのは、数値としてはそれほど高くないものの、従来は進行態で用いられていた「降りよーる」が結果態で用いられている点である。「降っとる」が進行態でも用いられていることを先に見たが、そうした乗り入れに伴い、逆に「降りよーる」が結果態でも用いられ、相互乗り入的に用いられる傾向が現れているものと考えられる。

なお、「降っとる」のバリエーションである「降っちよる」は、結果態でも極めて劣勢である。岡山市・福山市では、言うとすればほぼ「降っとる」である。

共通語形の「降ってる」(<「降っている」)も、先に見た進行態よりは数値が低いものの2割(岡山市)ないし4割(福山市)認められる。結果態として共通語形の「降ってる」を使う人も現在では一定程度いる点も注目される。

図 10-3 は岡山市と福山市を比較しやすいよう組み替えたものである。

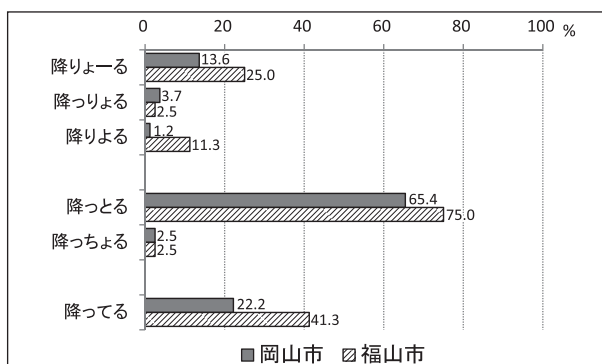


図 10-3 <降っている(結果態)> (岡山市と福山市の比較)

福山市は複数回答が積極的であったためか、どの表現についても使用者率は福山市が高くなっているが、結果態では現在でも「降っとる」が最も使用者率が高い点は両市で共通する。

図 10-4・図 10-5 は属性別（男女別・年齢層別）に分析したものである。

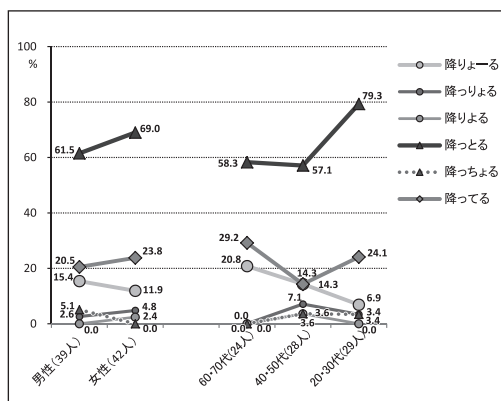


図 10-4 <降っている(結果態)> (岡山市)

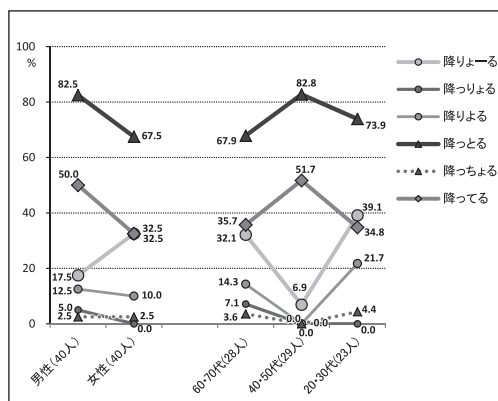


図 10-5 <降っている(結果態)> (福岡市)

男女差については、福岡市はやや微妙なところがあるものの、全般的には顕著な違いは見られない。

年齢層別に見ても、数値の変化方向が一貫してかつ顕著な違いは見られない。注目される「降りよーる」は、若年層に向け増加傾向が見られるかと推測されたが、そのような傾向は特に認められない。進行態としての「降つとる」の使用が現在では60・70代でも高くなっていることに連動し、年齢の違いにかかわりなく、相互乗り入れとして「降りよーる」がある程度使われやすい状況であったのかもしれない。

(4) 進行態と結果態の比較

図 11-1・図 11-2 は進行態と結果態を比較しやすいよう組み替えたものである。

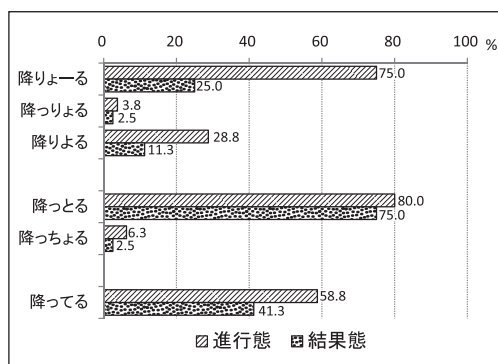
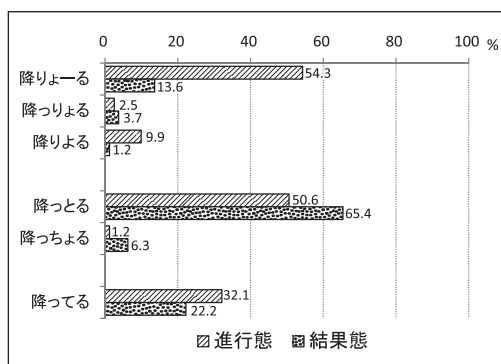


図 11-1 <降っている(進行態・結果態)> (岡山市) 図 11-2 <降っている(進行態・結果態)> (福岡市)

岡山市も福岡市も、結果態で使用者率が高い表現は「降つとる」であるという点は従来と変わらないが、この「降つとる」は進行態としても用いられ、その使用者率は従来の進行態の表現である「降りよーる」とほぼ同じである点は特に注目される。この「降りよーる」は、数値としてはそれほど高くないものの、結果態としても用いられている点も注目

される。すなわち、「降っとる」と「降りよーる」はアスペクト表現として相互乗り入れ的に用いられる傾向が認められる。

共通語の「降ってる」は、現在では岡山市でも福山市でもある程度ふつうに用いられる表現となっているが、結果態としてよりも進行態としての方が使用者率が高い。

以下では、先行研究で明らかにされていることとの関係という点から本研究の結果を検討する。

井上文子(1998)は、動詞の進行態と結果態を区別しなくなるという西日本全域に見られる変化、すなわち「テ」を介さない形式による進行態の〈オル〉系統の「～ヨル」を、「テ」を介する形式による結果態の〈オル〉系統の「～トル」(テ+オル)に置き換える形による進行態と結果態の統合という変化について、関西各地でのフィールドワークにより得たデータを言語地図等に表わし、分布状況からそのありかたを詳細に検討している。

また井上文子(2006・2007)は、GAJのうち「(桜の花が)散っている〔進行〕」(第198図)と「(桜の花が)散っている〔結果〕」(第199図)の全国分布の状況について要点を簡潔に解説している。それによると、西日本のうち近畿中央部では、結果の形式である「テオル」類が次第に進行も表すようになり、「進行：オル、テオル」「結果：テオル」のように、進行で両者が併用されるに至ったとするとともに、西日本全域のアスペクト表現は、進行と結果を「テ」の有無で区別する体系から、「テ」を含む形式への統合という流れで変化してきたとする。これには内的要因のほか、進行と結果の両方を表す標準語「～テイル」の影響もあると考えられるとする。以前から指摘されていた、進行態と結果態を区別せずに従来の結果態の「とる」で表すという変化傾向が、現在の岡山市・福山市においてかなり進行していることが確認された。進行態では「よる」も用い続けるという傾向については、現在の岡山市・福山市でもまさにそうであることも確認された。それに加え、岡山市・福山市では現在「よる」が結果態としても用いられる傾向が多少見られ、相互乗り入れという変化も認められることも確認された。

兵庫県南西部(姫路市)から岡山県南東部(岡山市)の間のグロットグラム調査をした村上敬一(2005)によると、動詞の進行態(「(向こうから)来ている」)については、岡山県側では岡山市で3年齢層とも「～トル」(「来トル」)であり結果態との対立が失われているが、それ以外の多くの地点では「～ヨル」(「来ヨル」)であり結果態と対立しているとする。岡山市ではすでに本調査の約10年前から、進行態としての「とる」が上の年齢層でも用いられていたようであり、現在では定着の度合いをさらに強めているものと考えられる。

村上敬一(2005)と地域が重なる播磨～備前～備中～備後のグロットグラム調査の結果をまとめた都染直也編(2007)によると、解説は特にないものの資料を見ると、進行態としての「食べている」は、全体的にタベヨルやタベヨーが優勢である中にあって、タベトルも各地点・各年齢層に一定程度認められ、約10年前から「おる」が各地で普及しつつあることが確認される。

山部順治(2004)は、出身地(6～18歳の最長居住地)を岡山県とする100名超の大学生(全員女性)を対象に、進行アスペクトとしての「～とる」と「～よーる」に関するアンケート調査を2003年に実施した。分析の結果、運動性が強い動詞ほど「～とる」の容認度(回答者自身の使用度合い)が高いとする。その動詞の一つに「降る」がある。「今、外は、雨がざー

ざー {降りょーる／降っとる} よ。」という文により進行アスペクトでの容認度(最大値は100)を調査しているが、「降りょーる」が94、「降っとる」が93といずれも非常に高いことを示している。すなわち、岡山県出身の若年層のうち非常に多くの割合が、本来の表現である「降りょーる」も容認していれば、本来は結果態を示していたが次第に進行態も表すようになってきた「降っとる」も容認していることがわかる。約10年前の岡山市での多人数調査(ただし若年層女性)でも、「とる」が進行態にかなり進出していたことがわかる。

中国地方の649地点を対象に2014年度に通信調査した結果を地図にまとめた岸江信介・塩川奈々美・清水勇吉・林琳編(2019)によると、解説は特にないが、進行態である「(外はいま雨が)降っている」は、「フリョール類」に加え「フツトル類」も重なるように分布している。同様に、「(桜の花がひらひらと今)散っている」も、「チリョール類」に「チツトル類」が重なるように分布している。「おる」の進出が確認される。

FPJDの結果を報告した大西拓一郎編(2016)によると、継続相(進行態)としての「(桜の花が)散っている」については、西日本には存在動詞「オル」を語彙的資源とする表現が広く分布しているが、中国地方山陽、四国地方、九州地方北部では-オル・ヨルが優勢であること、形式の分布範囲についてはGAJからあまり変化が見られないものが多いこと等を指摘している(解説=津田智史氏)。近畿等で使われている-テオル・トルは、中国地方の瀬戸内側ではほとんど見られない。各地域生え抜きの高年層に限定すると、「とる」の地域的拡大はほとんどないということであろう。

岡実咲(2018)は、関西中央部では、シトルが結果態に加え進行態も表すよう変化したのに伴い、本来は進行態を表していたシヨルがムード化して卑語として用いられるようになったことを受け、岡山県については若年層・中年層・老年層の3層を、岡山県以外の中国地方および四国地方については若年層を対象に、親しさおよび心配・迷惑の有無という観点(場面)から、シトルとシヨールの容認度(回答者自身の使用)をアンケートにより調査している。現象動詞「泣く」の調査結果については、岡山県の老年層ではいずれの場面でもシヨール(泣キョール)が優勢であるのに対し(すなわち単にアスペクトとして用いている)、若年層・中年層では<親しさ>や<心配・迷惑>を表す場面ではシトル(泣イトル)よりもシヨール(泣キョール)の方が用いられる傾向が見られるという結論を得ている。すなわち、このようなムードを伴う場面では、シヨール(泣キョール)は若年層・中年層でも残りやすいということだと考えられる。同様の傾向は広島県や鳥取県の若年層にも見られるとする。このことから、シトルへの一本化が進んでいる中であって「泣く」等の特に現象動詞では、シヨールは<親しさ>や<心配>を表すムード化が進行中であるとする。本調査ではこのような観点からは特に調査していないが、進行態での選択肢「(雪が)降りょーる」を、単に雪が降りつつある状態というだけでなく、憂慮すべき困った事態とイメージして「言うことがある」と回答した人もいるかもしれない。関西中央部で生じている「おる」のムード化は、当該地域でも今後注目すべき観点である。

4. まとめと今後の課題

以上、筆者が最近実施した岡山市と福山市における多人数調査の結果から、文法に関わる表現の使用状況を見てきた。

得られたおもな知見をまとめると次のとおりである。

(1) 動詞の否定の表現（否定辞）

岡山市でも福山市でも使用者率が最も高い否定辞は「ん」である。現在でもこれが最も一般的な否定辞である。

次いで使用者率が高いのは「ない」である。当地は本来「ない」を使わない地域であるが、共通語が普及した「ない」を使う地域からの転入者も以前よりは多く含むようになった現在では「ない」の使用者率も低くない。ただし、形容詞の活用語尾を融合して発音する傾向が強い当地においても、形容詞由来の否定辞「ない」を「ね（ー）」とする者はほとんどいない。これは、当地において否定辞「ない」は共通語的表現であるため、これを方言的に「ね（ー）」と崩すことはしにくいためと考えられる。

近畿中央部の否定辞「へん」の使用者率は1割ないしそれ以下と非常に低い。現在でも近畿中央部の「へん」は当地にほとんど及んでいない。

年齢層別に見ると、否定辞「ん」の使用者率は若年層においても高いまま安定している。共通語の「ない」も、一貫した傾向を持つ形での大きな年齢差は特に認められない。「へん」も若年層に向け増加するようなことはない。全般的に否定辞は顕著な年齢差もなく安定している。

(2) 動詞の否定過去の表現

岡山市でも福山市でも使用者率が最も高い表現は「んかった」である。

GAJでは当該地域を広く覆っていた「なんだ」はこれに次ぐ勢力に縮小している。岡山市と福山市を比べると、「なんだ」は岡山市の方が優勢である。GAJによると、福山市は「なんだ」の分布域の端に近い地域であるのに対し、岡山市は周辺にまで広く「なんだ」が分布していることから使用が安定している可能性が考えられる。

福山市で一定程度の使用者率が見込まれた「ざった」は全く用いられていない。岡山市でも同様である。

GAJで近畿中央部の一部に認められた取り立て否定由来の「へん」に「かった」を後接させた「へんかった」の使用者率は非常に低い。打消しの「へん」と同様、近畿中央部からの進出はほとんど認められない。

共通語形の「なかった」も現在では使用者率が低くない。

男女別に見ると「なんだ」は女性よりも男性での使用者率が高い。「なんだ」は現在では男女差を伴い、主として男性により使用される表現となっている。

年齢層別に見ると、新しい方言形の「んかった」の使用者率は若年層になるに従い一貫して増加する。特に20・30代での使用者率は8割超と非常に多くの者が使っている。この表現が現在当地で普及しつつあることがこうした年齢差に反映されているものと考えられる。ただし伝統方言の「なんだ」は、若年層に向け使用者率が著しく低下するということなく、一定程度の中で安定的に使われている。

(3) アスペクト

①有情物の存在動詞

アスペクト表現の土台となる有情物に関する存在動詞は、岡山市・福山市ともに現在でも「いる」よりも「おる」の使用者率の方が高く、8割前後が用いている。しかし「いる」の使用者率も少なくなく、岡山市で5割、福山市で7割が用いている。

男女別に見ると、共通語の「いる」は、両市とも男性よりも女性の使用者率の方が高い。年齢層別に見ると、方言形「おる」の使用者率は若年層になるに従い低下するというようなことも特になく高い数値を維持し、根強く使われている。

②進行態

岡山市でも福山市でも本来の「降りよーる」の使用者率が現在でも半数を超えるものの、結果態を表すはずの「降っとる」が進行態としても用いられている。その使用者率は「降りよーる」とほぼ同水準となっている。なお、「て」を介さない「おる」系の表現の中では、より原形に近い「降りよる」よりも、発音が[rɪo] → [rjo:]と変化した「降りよーる」の方が両市とも優勢である。

一方、人の存在動詞として「いる」を用いる人が岡山市でも福山市でも現在少なからずいることと連動し、共通語形「降ってる」(<「降っている」)の使用も、岡山市で3割、福山市で6割認められる。現在では共通語形を使う人も少なからずいる。

男女差については、福山市では「降っとる」は女性よりも男性で数値がかなり高い。

年齢層別に見ると、本来は当地において使われていなかった「降っとる」が、岡山市でも福山市でも60・70代ですでに数値が高くなっている。ただし従来の「降りよーる」は、20・30代の若年層でも数値が低下しているわけではない。「降っとる」と「降りよーる」を中心とする表現が安定的に使われているのが現在の状況である。

③結果態

岡山市でも福山市でも本来の「降っとる」の使用者率が7割前後と最も高い。結果態は「とる」で表現するという点は従来と基本的に変わらない。

数値はそれほど高くないが、従来は進行態で用いられていた「降りよーる」が結果態でも用いられている点が注目される。本来は結果態を表す「降っとる」と、本来は進行態を表す「降りよーる」が、相互乗り入れ的に用いられている。

共通語形の「降ってる」(<「降っている」)の使用も、進行態よりは数値が低いものの、岡山市で2割、福山市で4割認められる。結果態としても共通語形を使う人が現在では一定程度いる。

年齢層別に見ると、若年層に向け「降りよーる」の使用者率に増加傾向が認められるというようなことは特になく、進行態としての「降っとる」の使用者率が現在では60・70代でも高くなっていることに連動し、年齢の違いにかかわらず、相互乗り入れとして「降りよーる」がある程度使われやすい状況にあった可能性が考えられる。

④進行態と結果態の関係

上記と重複するところがあるが、進行態と結果態とを比較すると次のようになる。

結果態で使用者率が高い表現は「降っとる」であるという点は従来と変わらない。しかしこの「降っとる」は進行態としても用いられ、その使用者率は従来の進行態の表現である「降りよーる」とほぼ同水準である。その「降りよーる」は、数値としてはそれほど高くないものの、結果態としても用いられている。すなわち、「降っとる」と「降りよーる」はアスペクト表現として相互乗り入れ的に用いられる傾向が認められる。

共通語の「降ってる」は、現在では岡山市でも福山市でもある程度ふつうに用いられる表現となっているが、結果態としてよりも進行態としての方が使用者率が高い。

本研究では岡山市・福山市のみを研究対象としたが、本稿で明らかになった変化は、進行の遅速を伴いながら、これらの周辺地域でもおそらく進行中であると推測される。たとえば中国地方南部の備前・備中・備後全体を対象とする多人数調査、あるいは岡山県全域を対象とする多人数調査により、これらの地域全体における現在の状況を把握することは意義があろう。

また、本研究で論じた項目のうちアスペクト表現については、まさにアスペクトを表すという前提で論じたが、岡実咲（2018）が指摘するように、「降りよーる」等の進行態については、関西中央部と同様の下方向への待遇表現化（ムード化）が岡山市・福山市でも進行しつつある（＝「降りよーる」等が待遇表現として残りつつある）かもしれない。今後はそうしたことも含めて研究する必要があるだろう。

注

1 岡山市調査は下記の①の学内研究助成金を受けて、福山市調査は②③の学内研究助成金を受けて実施した。研究代表者はいずれも筆者である。なお、福山市調査は灰谷謙二氏（尾道市立大学）との共同研究である。岡山市調査の詳細については、最初の研究論文である尾崎喜光（2014）で説明している。

- ①「岡山市における方言使用・方言意識の現状と動態に関する調査研究」（2013年度）
- ②「広島県福山市民の言語使用と言語意識に関する多人数調査」（2018年度）
- ③「広島県福山市民の言語使用と言語意識に関する多人数調査（追加調査）」（2019年度）

参考文献

- 井上文子（1998）『日本語方言アスペクトの動態—存在型表現形式に焦点をあてて—』（秋山書店）
- （2006）「散っている〔進行・結果〕」『言語』35-12
- （2007）「アスペクトとその分布—〈オル〉系統の多様性—」『日本語学』26-11
- 大西拓一郎（2017）「方言の動詞否定辞過去形に見る日本語の重層性」『日本語学』36-2
- 編（2016）『新日本言語地図—分布図で見渡す方言の世界—』（朝倉書店）
- 大藤幸枝（1966）「岡山県美作地方方言における打消表現法について」『生活語研究』1
- 岡実咲（2018）「岡山方言のアスペクトに関する研究—シトルへの一本化に伴うショールのムード化について—」『岡山大学 国語研究』32
- 岡田統夫（1967）「打消の過去「～ダッタ」・「～ナンダ」・「～ンカッタ」について—広島県三原市深町下組における—」『方言研究年報』10
- 尾崎喜光（2013）「岡山における連母音の融合状況—多人数調査から見る—」『清心語文』15
- （2014）「岡山における連母音の融合状況（2）—「岡山市民調査」から見る—」『清心語文』16
- （2015）「「～でもらっていい？」の普及に関する研究」『清心語文』17
- （2016）「「大丈夫です」の用法の拡大に関する研究—不利益を想定して気遣う言語行動—」『清心語文』18

- (2017)「岡山市における話し言葉の男女差」『ノートルダム清心女子大学紀要 日本語・日本文学編』41-1
- (2018a)「現代日本語における親族呼称の時代変化と加齢変化」『ノートルダム清心女子大学紀要 日本語・日本文学編』42-1
- (2018b)「“古風な語”と“新しい語”の使用と動態に関する研究—「複合保存」と「旧物新語」—」『清心語文』20
- 岸江信介・塩川奈々美・清水勇吉・林琳編(2019)『中国地方言語地図』(徳島大学日本語学研究室)
- 都染直也編(2007)『JR 山陽本線・赤穂線 姫路-福山間グロットグラム集』(甲南大学方言研究会)
- 友定賢治(1993)「岡山県方言の研究(4) 否定表現について」『文教国文学』30
- 村上敬一(2005)「兵庫県南西部・岡山県南東部における関西中央部方言の受容—JR 山陽本線・赤穂線沿線グロットグラム調査から—」陣内正敬・友定賢治編『関西方言の広がりとコミュニケーションの行方』(和泉書院)
- 山部順治(2004)「進行アスペクト辞の文法の話者間変異と言語・方言間変異 岡山方言の資料に基づいて」『ノートルダム清心女子大学紀要 日本語・日本文学編』28-1